# 一日前プロジェクト

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方々や災害対応の経験をもつみなさまにお集まりいただいて、

- ◆ 被災直後の行動
- ◆ 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ◆ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したい
- ◆ 日頃から何を準備しておけばよかった

といったお話しを聞かせていただき、そこから導き出される教訓や身につまされるお話しを小さな物語(エピソード)に取りまとめる活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた約450の物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」http://www.bousai.go.jp/km/に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください！きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

内閣府
(防災担当)

阪神・淡路大震災(平成7年1月)　　神戸市 60代 男性 元市職員

## 出勤か、救助か、悩む
### ～誰かがジャッキ、12人助ける～

私の家はつぶれなかったけれども、周りはほとんどつぶれました。立場を考え、出勤すべきか迷ったあげく、その日は夜まで救助活動を続け、12人助けました。

家の下敷きになった人を助けたのですが。その助け方が難しいんですよ。上からいったら人の重みがかかって危険なので、下からもぐり込んで助けるんです。木造の建物などは、梁にジャッキをかませたりしてね。

最初、大きなジャッキでやろうとしたけど、重たくて扱えない。そのうち、近所の誰かが小さいジャッキを持ってきてくれたので、それを使って、ちょっとずつ持ち上げていきました。車のジャッキも使いましたが安定が悪くて、案外使いづらかったんです。

で、頭が入るぐらいの大きさまでになったら、そこからもぐっていくのですが、余震があるから、これがかなり恐いんです。私は田舎の百姓の育ちだったから、できたけど、町の人には難しいやろうね。

阪神・淡路大震災(平成7年1月)　　神戸市 70代 男性

## 知っていれば良かった救急救命法

ほんとうにこれを知っとけば良かったというのはね、今で言う救急法の知識ですね。

当時17歳の女の子が助け出されて、50代後半に近いおばちゃんが一生懸命人工呼吸をやっていて、私も手伝って、その子が一度は息を吹き返したんです。

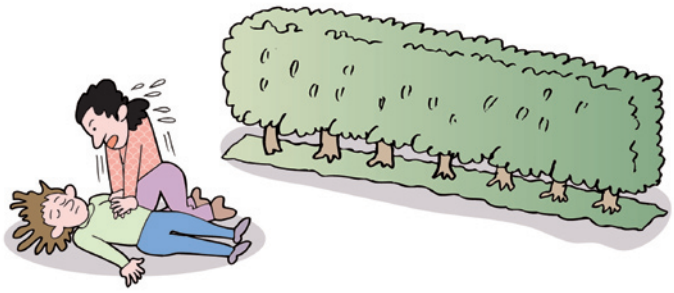
そこで私は、「息吹き返したからこれで大丈夫や」と思い、「あと、お願いします」と言ってその場を離れました。とにかく、他にも助けなければならない人がたくさんおったから。

でも、後で、その子が数時間後に窒息で亡くなってしまったということを聞きました。

救急法の「気道確保」とかを知っていたら、口あけて、口の中に詰まっている土を取り出してジュースでも探してきて口をゆすいであげていたら、あの子は助かったかもしれないという思いがずっと残っています。

寝ていた場所がわかっていれば、土壁の土ぼこりを吸い込んでいるかもしれないと気づいたのかもしれないんだけど、どんな状況で助けられたのかも聞かされていませんでしたし。

実際にそういう状況で助かった子もいたようですからね。救急法の知識をもっとちゃんと身につけていれば良かったと、今でも悔やんでいます。



★一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成13年(2001年)芸予地震(平成13年3月)　　呉市 60代 男性 元消防団員

## 「あんたがやるんよ」
### ～わざとスコップ持たずに地域の見回り～

地震のあと、地域の見回りをしていると、「うちのガレキは誰が片付けるん」って声をかけられました。「あんたがやるんよ」と言ったら、不満そうな顔をされましてね。

私は、被害はそれほどでもないのに、自分の家の瓦も自分で片付けない人がいるんだなと、ちょっと残念に思いました。で、それからはわざとスコップを持たずに歩きました。

被災して人に頼りたい気持ちはわかるけど、どこでも地震が起こる可能性があると言われているんやから、みんながその気になって用意せないかんと思います。うちの自治会では、自分たちで土のうを作れるようにグランドゴルフ場のそばに砂を用意しているし、いちばん山の上の自治会なんかは、防災倉庫を作って、そこにスコップなどの道具をいっぱい揃えています。そこの会長さんは、「消防はすぐ来やせん。ここまで来るのに20分はかかるだろうから、その間はわしらで何とかせないけん」といつも言っていますが、ほんとうにそのとおりだと思いますね。

宮城県北部を震源とする地震(平成15年7月)　　石巻市 70代 男性

## 野球ボールを使ってブルーシートをかけました
### ～苦労きっかけに防災班～

地震の翌日もずっと雨が降っていたもので、屋根にブルーシートをかけなくてはならなかったのですが、いかにもタダでやってくれるような恰好をして、えらいお金をとる人もいました。

そこで、私たちはビニール袋に入れた野球のボールに釣り糸をつけて、屋根の向こう側に投げるやり方を考えたわけです。その釣り糸をブルーシートの穴に通しておけば、向こう側から糸を引っ張ると、シートがシュッ、シュッ、とあがっていくわけです。

それから、私は少年野球のコーチを長年やっているので、総2階の家なんかは、ノックバットを使って、キャッチャーフライの要領でボールをポーンと上にあげるんです。これはちょっと技術が必要ですけれどね。

とにかくブルーシートをかけるのにうんと苦労したから、地域の防災班をいち早くつくろうと思ったんです。1人は1人のことしかできないということで、大体4戸で1班。こっち側とあっち側で最低限4人いればブルーシートはかけられますからね。雨の中、屋根の上にあがって危ない目にあうことはないんですよ。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは､非営利の目的であれば､広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成16年(2004年)新潟県中越地震(平成16年10月)　　小千谷市 60代 男性

## 大工の私が一番後悔
### ～家具の転倒防止を勧めておけば…～

私は大工をしているものですから、いわゆる皆さんの家の建築工事に携わっていて、いろんな面で家財道具の転倒防止というのを、盛んに言われてきたのを知っていたんです。

でも、まさかその当時は夢にも思わなかった、こういう大地震というのは。
今回の地震では、もちろん構造自体もそうだったんだけど、まず家財道具の転倒がものすごかったんです。ですから、そういうのをあらかじめ、やはり転倒防止、たとえば食器棚やタンスとか、ほんのちょっと、わずかなことなんだけど、それをしておけばまだ被害が軽かったなというのが、災害後にまず実感したこと。

一番後悔しているといいましょうか、そんな感じがしました。

福岡県西方沖を震源とする地震(平成17年3月)　　福岡市 50代 男性

## つくりつけの家具で救われる
### ～倒れるかと思った高層マンション～

私の家は、9階建のマンションの最上階です。地震が起きた時は、まず体験したことがない揺れでしたので、「あ、このマンション倒れるな」とふと思いました。それから、子供が家に居たので、無我夢中で子供部屋を見に行きました。
うちは幸運にも、4、5年前にリフォームをして、家具を全部「つくりつけ」にしていましたので、タンスが倒れることもありませんでした。隣の家に行ってみると、棚の上のテレビは落ち、大きな家具は倒れ、金魚鉢も見事に割れていました。
家具を「つくりつけ」にしたのは、地震を意識していたわけではないんです。収納力がアップするし、見栄えもいいという、ただそれだけの理由でした。
今回の地震で、つくりつけの家具*と後置きの家具がこんなに違うんだということを実感しました。ほんとうに、たまたまでしたが、ラッキーでした。

＊つくりつけの家具とは、取り外しのできない、壁などと一体化して作られた家具のこと。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは､非営利の目的であれば､広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成19年(2007年)能登半島地震(平成19年3月)　　輪島市 70代 女性

## なべもセイロも吹っ飛んだ
### ～地震のときは身うごきとれず～

私たちは、公民館でおもちつきのイベントをするというので、朝7時から出て、ちょっと早かったけれど、8時ごろにはもうセイロに蒸す準備をしていて、ガスにお湯をかけたりしていました。

そしたら「ドーン」という音と一緒に、5つ重なっていたセイロが全部ばらばらになって地面に落ちました。でかい音がしたから、「どこかに飛行機が落ちたのか」と思ったけれど、だれかが「地震や、しゃがめ、しゃがめ!」と。それから地面が大きく揺れて、私たちがいたテントが真っ二つに折れたんです。

それで、「だれか、ガス消して、消して!」と叫びました。ガスを消さなきゃいけないから、そこへはっていこうと思うんだけど、地面が波をうっていて、動けなかったんです。

あとで見たら、火は消えていました。でっかいナベにお湯がいっぱいわいていたから、そのナベがひっくり返って火が消えたんだと思います。ちょうど火のまわりに人がいなかったときだったから良かったけれど、そばにいたら大ヤケドをしていたと思いますね。

平成19年(2007年)新潟県中越沖地震(平成19年7月)　　柏崎市 40代 男性 会社員

## 「あ、地震だな」とは思ったけれど
### ～すぐに机の下にもぐるべきだった～

休日出勤をして自分の席にいました。突然ガタガタガタっと揺れて、「あ、地震だな」とは思ったんですけれど、あそこまで大きくなるとは思っていなくて、そのまま椅子にすわっていました。でも、そのうちどんどん揺れがでっかくなって、最後は机にしがみつくかっこうになりました。

会社として、前回の新潟県中越地震以降、避難誘導では、各自ヘルメットをかぶって、まず2階のメンバーを集めて、一緒に下までおりて外の駐車場に避難するということになっておりました。それで、当時2階にいたメンバーに、「ヘルメットをかぶって下におりるぞ!」と叫ぶのですが、腰がぬけたのか、なかなか来ないんです。だんだん叫ぶ声だけ大きくなって、「もう!」っていう感じで待って、そのメンバーと一緒に避難しました。

揺れている時間は結構長かったと思います。今思えば、落下物から身を守るためにも、すぐに机の下にもぐらないといけなかったですね。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震(平成20年6月)　　栗原市 60代 男性

## 不安から希望へ

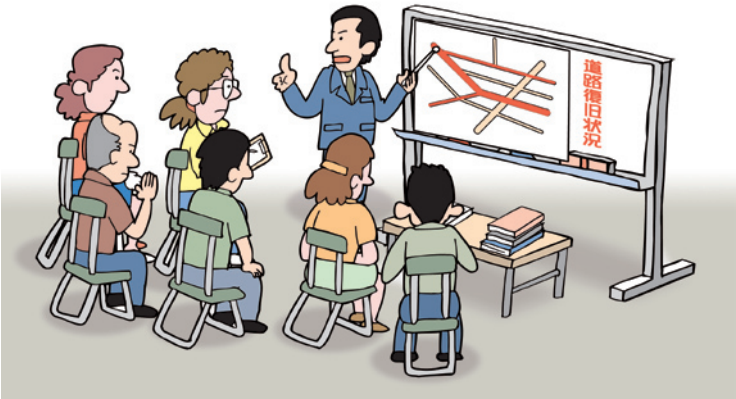
### ～道路工事の進み具合を知り、気持ちも前向きに～

被災して、自分たちの住むところから外に出されて、集団生活をするわけですが、やっぱりその時には、まず自分たちが先行きどうなるのかなということが心配なのです。その見通しというやつが見えないと不安なんですよね。だから、何を見ても、何を聞いても、何を食べても、うわの空でした。

果たしてもとの生活に戻れるのか、「これからどうするべ」というのがわからんうちが、ほんとうに苦しいんですよ。だから、本音で言えば、やっぱり1カ月ぐらいは、「もうほっといてくれよ」という感じでしたね。

で、避難生活に少しずつなじんでくると、山に戻るための道路をつくってもらえるのかとかが気になり出しました。行政がどのように考えているのか、ひょっとしたら集団移転させられるのかという不安もやっぱりありました。

でも、早い時期に県知事が、「被災地を見捨てはしない。必ず復興させる」というコメントを発表してくれましたし、国とか県の方たちが、大きな図面とかを持ってきて、道路工事の進捗状況を途中途中で開示してくださったので、私たちの気持ちもだんだん前向きになっていきました。




平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震(平成20年6月)　　栗原市 40代 女性

## 学校に行かれなくても安心

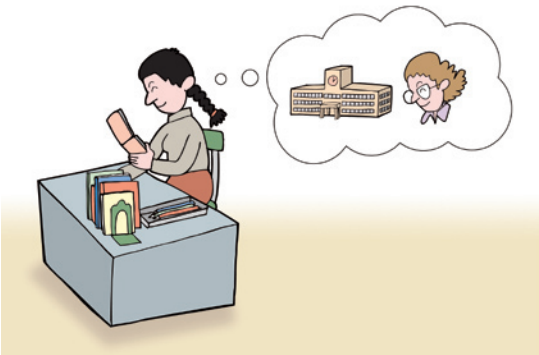
### ～先生からこまめにメール～

当時、私の娘は高校3年生でしたが、ちょうど模擬試験を受けている最中に地震が起きたのです。でも、ちょうど避難訓練を受けた直後だったこともあり、特に混乱なく避難できたようです。

前の宮城県沖地震*が6月12日だった関係で、この辺の学校はよくその時期に避難訓練をするんですよ。まず全員が校庭に出て、その後、落ちついてから男の子たちが教室に荷物をとりに行ったと聞いています。

親として有り難かったのは、避難した校庭で、先生がみんなの携帯の番号とメールアドレスを控えて、連絡網をつくってくれたことです。その日からしばらく学校は休みになってしまったのですが、「先生たちは、今日、こういう片づけをしたよ」といった便りや、学校からの連絡事項を、担任の先生がこまめにメールで流してくれたんです。

学校の施設にもかなり被害が出ましたが、「階段がこんなになっちゃったよ」と、先生が撮った写真を送ってくれたりもしました。子どもたちが意外と不安なく過ごすことができたのは、こんなふうに、先生とのコミュニケーションがとれていたからではないかなと思います。



＊昭和53年(1978年)6月12日に仙台市を襲ったマグニチュード7.4(震度5)の地震で、死者16人、重軽傷者10,119人、住家の全半壊が4,385戸、部分壊が86,010戸という多大な被害が生じました。

★一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成11年(1999年)6月末梅雨前線豪雨(平成11年6月)　　呉市 70代 男性

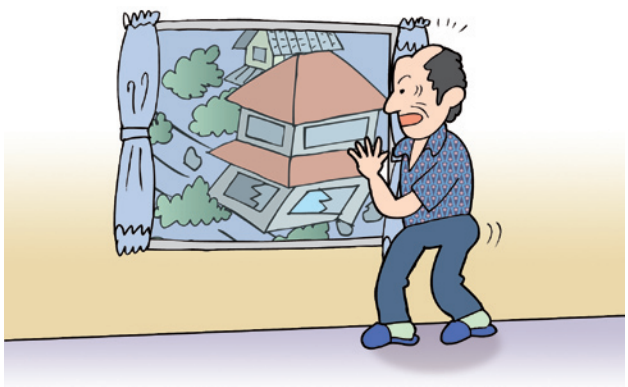
## 「サラサラサラ」と流れていった隣の家

### ～「99%中に人がおる」の一言でレスキューがすぐ救助～

山が崩れる前に、私は家から道路を見よったんです。道路は川のようになっていて、上から植木鉢やら何やらが流れてきていました。そしたら、「サラサラサラ」と隣の家が流れ始めましてね。裏の山も崩れて来て、流れた家はその土砂に押し出されて、下の家にダンとぶつかったんです。

こりゃ大変だと思って、市役所か消防署かに電話しましたが、どちらかが通じませんでした。でも、たまたま、うちよりもっと上に行こうとしていた消防車が通りかかりましてね。「あの家には誰か住んでいますか?おりますか?」と聞くものですから、「99%おると思う」と答えました。レスキューの方がすぐ救助にかかってくれて、屋根に穴を開けてね、だいぶ時間かかったんですけど、土砂に半身埋まっていた方を救助できました。あのとき、「99%中に人がおる」って言う人がいなかったら、ほっておかれたかもしれないので、助かって良かったなと思います。

今、自治会と民生委員とでやっていますが、一人住まいの方とか体の弱い方がどういう場所におられるのかを書いた地図をつくったり、声かけしたり、というのが、これからは重要だなと思っています。



平成11年(1999年)6月末梅雨前線豪雨(平成11年6月)　　呉市 60代 男性

## こういう時に避難させてええんかどうか

### ～難しい自治会長の立場～

土砂に流されて亡くなった方の中には、家の中にずっとおれば、被害にあってないかもしれない方がいるんですよね。自治会の相談役ともいろいろ話したんですが、こういう災害が起きる時に、避難させてええんかどうかの判断は難しいなと思うんです。自治会長から避難してくださいとか言うルールを作るわけにもいかんし、なかなか結論は出んのです。

避難場所もルートも決まっていますが、そのルートというのが、坂道で水がドードー流れて、石もたくさん流れるところなんです。そこから避難場所まで避難する間に、石に当たって倒れる可能性があるものですから、このあたりの判断を、ちょっと勉強せないかんなと思ったり、通報があっても個人の判断に頼るしかないかなと思ったりするんです。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは､非営利の目的であれば､広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成11年台風第18号（平成11年9月）　宇部市 60代 男性

## 2度目の経験 記録に残そうと写真撮る

私は2回ほど台風災害に遭っているんですよ。1回目は昭和17年、小学2年の時でした。この時は、父も母もどこに行ったか、家族全員バラバラになりました。

自分は知らない人に山の手の方に連れて行ってもらい、3日ぐらいその人の家でお世話になりました。その後、家に連れてきてもらって、ようやく姉弟たちと再会できたという非常に悲しい経験を持っています。

それから約50年後、その時の災害のことなんか、すっかり忘れていました。「ああ、台風が来る、すごいな」とか言うて、家の中から庭を見ておりましたら、瞬く間に水が胸まで来たわけです。家内が「助けてくれ」と言ったって、どうすることもできない。最悪の場合、屋根に上がるかという話をしておりましたら、水が引き始めたんです。

「よし、この際写真を撮ってやろう」と思って、胸までつかってこの写真を撮りました。写真に写っているのは、流されてきた車です。「この中に人がいるんです。助けてください」と言ったって、どうにもならなかったんです。

水害のときに一番悲しいのは、助けてあげたくても、自分も浸かっているから助けてあげられないということ。だから、自分は一生懸命逃げる。それしかないと思うんです。

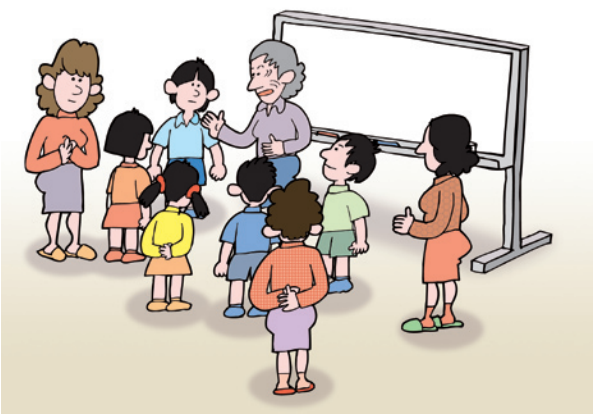
平成11年台風第18号（平成11年9月）　宇部市 60代 男性

## 高潮きっかけに自主防災会
### ～やっぱり日ごろのおつき合い～

私はあの台風18号を契機に地域の自主防災会を立ち上げました。毎年8月30日に訓練をやっていますが、この自主防災会をみんながもっと理解できるような、きめの細かい方法をとっていくと同時に、日ごろから良い人間関係をつくっておくことが大事なんじゃないかなと思っています。

高齢者になればなるほど、ボランティアといえども家の中に一歩も入れんときが多いんですよ。人間にはいろいろ好き嫌いがありましてね。それを解決するのはやっぱり自治会長。各班にいる班長をうまく活用して、気軽に物の言えるような環境を日ごろからつくっておけば、ある程度うまくいくんじゃないかなと思います。

近頃は、向こう三軒両隣のほうが仲が悪いこともあるんですよ。隣に聞いたら「知らん」、ずっと向こうの人が知っちょったとかいう話でね。だから、となり近所のつき合い方が、昔のような状態に戻らんと、やっぱり自助・共助・公助というのは難しいと思いますね。



今、婦人会では、3世代の交流の場を作って、子どもたちもみんなひっくるめて、お年よりから戦前の台風の話とかを聞かせてもらって、一緒に学びあうということもしています。

災害時に助け合うには、いわゆる『日ごろのつき合い』。これに尽きると思いますよ。

★一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成11年台風第18号(平成11年9月)　　宇部市 60代 女性

## 災害時にも必要だった女性の視点

被害にあったおばあちゃんのところに、ボランティアの方にやっと来てもらったんです。でも、そのおばあちゃんは、結局見てもらいたくないものがあるのか、「女性のボランティアの人に来てほしい」と、こう言われたんです。

で、市のほうに行ったら、女性のボランティアの人は今はおらんと言う。仕方がないので、市の福祉課に電話して、「ばあちゃんが困っているけん、相談相手になってくれんかね」とお願いしました。

やっぱり女性の視点が要るというのは、今どこでも教えられていますよね。部屋の押し入れを片づけてもらう時にも、女性の物や何かがあるから男性では困る。だからと言って、女性の力ではモノを運びきれないという矛盾がありました。

また、災害で避難した女性が着替えをする場所を確保するとか、女性への配慮が必要だということもこれから啓発して欲しいと思っています。

平成16年台風第23号(平成16年10月)　　豊岡市 50代 男性

## 製品はすべて産業廃棄物
### ～10トン車で6回捨てて操業再開～

水に浸かった製品は売り物になりませんから、もうすべて産業廃棄物*になってしまいました。被災している社員も多く、道路が冠水でところどころ通れない状況になっていまして、集まりにくい状況でしたが、あくる日には社員8名全員が集まってくれました。

会社が操業する前に、まず片づけをしなきゃいけない。片づけるということは、すなわち捨てるということなんですね。製品をすべて捨ててしまわなきゃいけないという非情さを味わいました。

水害に備えるには、製品を事前に他の場所に移すことが良いと思いますが、スペースの問題があってなかなか難しいものがあります。実際、前の日に一部の製品を高いところに上げるように指示はしていたのですが、ごくごく一部でした。ただ、ミシンとかの生産設備やコンピューター関係が無事だったことは不幸中の幸いでした。

指定された廃棄場所まで、少なくとも10トン車で6回は捨てに行きましたね。結局、操業まで約2週間かかりましたが、取引先なども手伝いに来てくれて、人の温かみというか、親切さを、つくづくありがたいなと思いました。

＊産業廃棄物とは、産業活動の結果、排出されてくる廃棄物のこと。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは､非営利の目的であれば､広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成17年台風第14号(平成17年9月)　　杉並区 40代 女性

## 「川があふれてます!」と必死で玄関のチャイム鳴らす

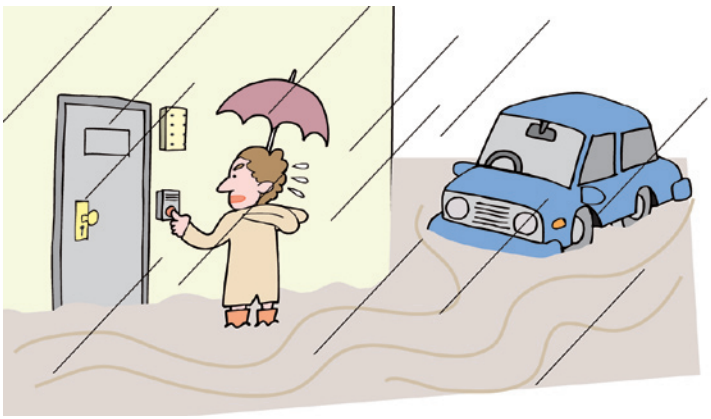
### ～緊急時には、声をかけあって～

とにかくすごい雨音だったし、みんな雨戸やシャッターを閉めているから、外がどうなっているのかわからないんですよ。私も外に出て初めて大変な状況になっていることに気がつきました。

私は膝ぐらいまで水につかりながら、うちの前の通りを端から1軒1軒ピンポンを押して、「今、川があふれています。ガレージの車をとにかく早目に上げたほうがいいですよ」と言って回りました。

あの時ほど、スピーカーが欲しいと思ったことはありませんでしたね。私が玄関でワーワー言っていると、何事かと思って雨戸がガラガラっとあき、「おーっ」と初めて状況がわかったというお宅が何軒もありました。

今は住宅の防音も良いので、やはり、緊急時には、となり近所に声をかけあわないと、大変なことになると感じました。



平成18年梅雨前線による豪雨(平成18年7月)　　諏訪市 30代 女性

## 立入禁止でも危機感なく

### ～ズボンの裾まくり水の中を自宅へ～

当日は、会社から帰って、水害で浸かったあたりで飲んでいました。会社から帰る時点で大雨だという連絡はあったんですが、飲みに行くころには普通だったので出かけていました。家に帰るときには、既に50センチくらい水が上がっていて、道路一面は海原のような状態でしたが、ズボンをめくって、わざわざその中を帰ったんです。帰る途中、マンホールの周りに「危ない」という標識が立っていたのはとても印象強く覚えていますが、その時点では水が透き通っていたから、そんなに危機感もなく帰りました。

考えてみると、家って人が絶対帰る場所なんですよね。今、携帯で当時の写真を見たら、立入禁止って書いてあるんですよ。でも、私はそれを越えて家に帰っているから、人ってどんなに家が危ないときでも、家に向かってしまう習性があると思うんです。危ないときには、家じゃないところに行くという習慣をつけておかないと、すごく怖いなと思いました。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成18年台風第13号(平成18年9月)　　延岡市 60代 男性

## 1時間で開始、公民館の炊き出し

救急病院に次から次へと患者さんが運ばれてくるのを見て、消防団員に「災害本部を公民館に設けるから、後を頼む」と言って、公民館に引き返し、すぐに災害本部を立ち上げました。

その時には、もう婦人部の部長さんが来ていて、「区長、炊き出しはどうしますか」と言われました。「そんなこと、おれは全然頭になかったわ」と言ってね。「長引くかもしれんから、頼むわ」と言った1時間後ぐらいには、もう炊き出しが始まっていました。

その部長さんが器材や食材はもちろん、人も20名ぐらい集めてくれましてね。

いつもながらのお握りを作ってくれたので、さっそく公民館に避難してきた皆さんに食べていただきました。

炊き出しの手際良さも、被害にあわれた方が公民館に避難してきたのも、いつもやっている防災訓練のおかげだったと思います。

平成20年8月末豪雨(平成20年8月)　　岡崎市 70代 男性

## 町内にボランティアのサテライト

### ～地元の問題解決にひと役～

私は総代*をやっているのですが、うちの地区の被害が大きいことを知った社会福祉協議会から、「ボランティアさんが来てくれます。何人要るか、自己申告してください」と連絡がありました。

当時は、地元にはボランティアを受け入れるコーディネーターという人がひとりもいませんでした。私がそれをやる役目と思われていましたが、とてもそんなことができる状態じゃなかったので、「できません」と言いました。しばらくそれでもめましたが、地区の中にサテライト*を作ってもらうことになって、問題が解決しました。

サテライトがないころは、ボランティアの本部に電話しても通じなかったり、現場のことがよくわかってもらえなかったりで、要領を得ませんでした。だから、サテライトが地域にできて、ものすごく助かりました。私は、今回の水害で一番助けてもらったのは、ボランティアの人たちだと思っています。

＊総代とは、町内会の代表者のこと。岡崎市ではこの呼称を用いている。

＊サテライトとは、ボランティア活動の調整を行うボランティアセンターの地域事務所のこと。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成21年7月中国・九州北部豪雨(平成21年7月)　防府市 50代 男性

## まるで地獄の使者のよう
### ～木、岩、砂が家に「バリバリッ」～

地獄の使者のテーマソングのような、地面からゴーっとわき上がってくるような音がしました。その音が上の方からだんだんこちらに近づいてくるような感じがして、両ひざ立ちで窓の外を見ると、30メートルぐらい先に土石流が迫っていました。横倒しになった木と無数の岩、それに大量の砂がどんどん押し寄せてきたのです。

「うわ、家を直撃だ!」と、思わず後ずさりしたとたん、何かがドーンと家に当たり、バリバリッという音がして、すぐに腰まで水に浸かってしまいました。

割れた窓ガラスが勢いよく水と一緒に僕の体のほうへ攻めてきたので、足が切れて、水が血で真っ赤に染まりました。

逃げるためにはどうしたらいいかなと考え、「あっ、そうか、靴を履けばいいんだ」ということでね。裏返しになってスーっと流れてきた片方の靴をはき、倒れたソファーやイスなんかの上を歩いて行くと、もう片方の靴が浮いていました。水をかいてたぐり寄せ、それを履いて、一番近い出口から逃げようと思ったけど、サッシが曲がって開かないんです。

で、土石が入ってきた玄関のほうから脱出したのですが、玄関の前は4、5メートル掘られて川のようになり、ゴーゴーと水が音をたてて流れていました。結局、建てて間もない我が家に、再び帰ることはできなくなったのです。

平成21年7月中国・九州北部豪雨 (平成21年7月)　防府市 50代 男性

## 近くの大災害もニュースで知る

あの日は『海の日』の翌日。朝の8時半ごろから雨がどんどん降ってきてね。これは少し異常だなと思いました。で、車であちこち見て回りました。川には濁流が流れていて、とにかく雨の降り方が尋常じゃないわけです。もう、確実に異常でした。

家へ戻ると、近所の人から「谷が崩れ始めたので、何とかしてくれ」という電話があり、すぐに消防団に連絡をして、軽トラックに土のうを積んできてもらうことになりました。私に道まで出て案内せよという依頼だったので、そのお宅まで誘導しました。

で、土のうを積んで、家のまわりの小さな溝から水が浸入するのを何とか防ぐことができたのですが、軽トラが作業を終えて渡ったとたんに橋がドーンと落ちたんです。ほんのちょっとの時間差でした。

そのうち、はじめは透き通っていた神社わきの渓流も赤み泥に変わり、最後は真っ黒な水となりました。それを見て、「どこかが崩れたな」と直感しましたね。

午後の3時頃だったか、上空をヘリが飛びかうようになって、「何が起こったのだろう」と。でも、すぐ上の老人ホームが大変なことになっているなんて、夕方にテレビをつけるまで知りませんでした。

★一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

雲仙岳噴火(平成2年11月～平成8年6月)　　島原市 70代 女性

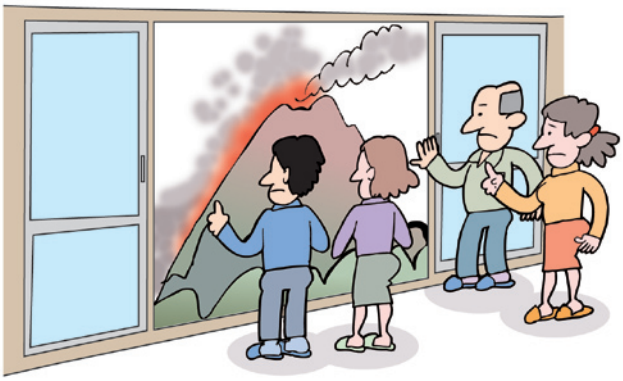
## 足りなかった心構え
### ～自宅から火砕流*見物～

うちの居間の戸を開けると、火砕流が見えるんです。ぱっと赤くなったら、電気を消して、真っ黒い空に真っ赤な明かりが下って行くのを、「今、2回目」なんて言いながら、まるで花火見物でもするように見ていたんです。

親戚なんかも、「ちょっと遊びに来ん？このごろはきれいかよ、うちの茶の間から見えるから」と言ってきてね。

実は、火山の知識のある息子から、「そろそろあぶないから、お母さんたちは逃げる用意をしときなさい」って言われていたんですよ。「家族と東京に行くから、避難するときは長崎の家を使っていいよ」とカギまで送ってよこしてね。

でも、わたしは、「何を言っているの?」と、耳を貸しませんでした。火砕流のほんとうの恐ろしさを、想像することもできなかったのです。



*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。

雲仙岳噴火(平成2年11月～平成8年6月)　　島原市 50代 男性

## 話し合っておくべきだった避難先

大火砕流*の際、市外にいたので、「家族は大丈夫だろうか」ということで頭がいっぱいでしたね。避難場所に指定されていた近所の中学校の体育館には避難できないという情報が入ってきましたので、「そしたら避難場所はどこだろう。どこに行けばいいんだろう」って、車を走らせながらずっと考えていました。

で、とりあえず、市の体育館に行ってみたんです。でも、そこにも家族は見あたらなくて、あわてました。子どもは小学生だし、一番下の子はまだ4歳ぐらいでした。どこでどうしているのだろうかと、心配でたまりませんでした。

それから、交通規制がしかれていないところに親戚があったので、そこに行ってみると、家族全員がいたわけです。ほんとうにホッとしました。

噴火に限らず何かあったときには、どこに行くことにするよとか、家族で避難経路についてよく話しあっておくべきだなと、そのときつくづく感じましたね。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。

★一日前プロジェクトの物語･イラストは､非営利の目的であれば､広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

平成12年(2000年)有珠山噴火(平成12年3月)　壮瞥町 70代 男性

## 準備万端でクールに受け止め
### ～ニュースにならないとメディア引き上げ～

うちの地域は、昭和52年の噴火を教訓に、避難所は住民が自主的に運営して、行政職員は現場に戻ってもらうという主義でやっていましたから、避難所の収容人員も少な目にしてプライバシー確保の衝立も用意し、避難したその日から町営の温泉に入れたほど、準備万端でした。

ただ、その避難所から噴火そのものは見えませんでしたから、放っておくと、「もう火の海ですよ」とか、「あの辺一帯、全滅ですよ」とか、いかにもそれらしい話ばかりが入ってくるわけです。ですから、できるだけ現場の情報を得てはもって帰って正しい情報を伝えるとともに、毎晩食事の後に、自衛隊が空撮したビデオをみなさんに見てもらいました。すると、自分の目で確かめることができて、「わあ、自分の家は安全だ」と、すごく落ち着くんですよ。危険の及ばない距離から現場を見せると納得するんですね。

私は、地域で積み重ねてきたことがどう機能するか点検している気分でしたし、災害にかみつく人が誰もいない。報道陣にマイクを向けられて「大変ですか」と聞かれても、「自然現象だからしようがない」とかいうコメントしか出ないので、記事にならないと避難所からも引き上げてしまいました。極めてクールな雰囲気でしたね。

平成12年(2000年)有珠山噴火(平成12年3月)　洞爺湖町 70代 女性

## 避難中も空き事務所で商売続ける
### ～一旦離れたお客は二度と戻ってこない～

うちの商品は乾物と冷凍食品です。冷凍庫が必要なのですが、一時電気がとまりましたでしょう。だからかなりの損失が出ました。それに、6月に元の場所に戻るまで手つかず状態でしたから、商品は賞味期限切れとなり、全部廃棄処分にしました。

自分たちは、昭和52年の噴火の時に、商売を始めたばかりで半年もしないうちに家を壊されて、何も営業ができなくて、ほんとうに長く苦しい時間を過ごしてきた経験がありますから、事業だけは絶対続けなきゃという信念で、すぐに商売を再開しました。

「もうあそこはだめだから、同じものだったら他から購入しよう」というところが出てきますからね。一旦そうなったら、二度とお客は戻ってきません。だから、冷蔵庫がない分、物をいっぱい集めて、注文をとったら配達して、帰ってきたらすぐまた次のところに走るということで、主人と息子は、積み上げた荷物の中に畳1枚敷いて、そこで寝泊まりをしていました。

避難している間に、事務所や倉庫を提供してくれた方々にはほんとうに感謝しています。それがなかったら、営業は続けられませんでしたからね。

★一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどに自由にお使いになれます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(http://www.bousai.go.jp/km/)からダウンロードしてください。

# 一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

## ー簡単な手順を紹介しますー

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

↓

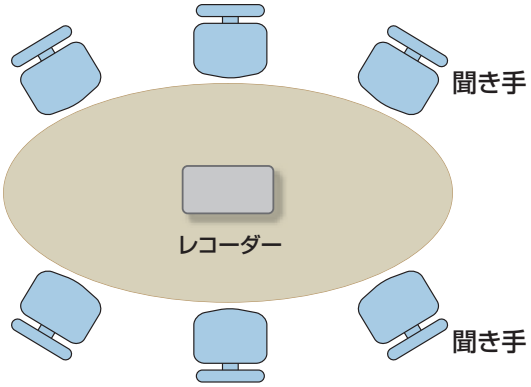
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

↓

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

↓

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらう ※話し手は、2人～4人が適当




「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

↓

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

↓

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき　共 感　反 省

# 第25回 防災ポスターコンクール入賞作品

## 防災担当大臣賞

**幼児・小学１～４年生の部**

愛知県
名古屋市立名北小学校 1年
墨 花菜(すみはな)さん

**小学５・６年生の部**

滋賀県
大津市立志賀小学校 6年
兵頭 昌和(ひょうどうまさかず)さん

**中学生・高校生の部**

青森県
青森県立三本木高等学校付属中学校 2年
大久保 いちご(おおくぼいちご)さん

**一般の部**

長野県 長野市
平林 錠路(ひらばやしじょうじ)さん

## 防災推進協議会会長賞

**幼児・小学１～４年生の部**

三重県
富田文化幼稚園 年長
大林 恋子(おおばやしここ)さん

**小学５・６年生の部**

愛知県
だれでもアーティストクラブ 6年
山下 瑠唯(やましたるい)さん

**中学生・高校生の部**

福井県
坂井市立坂井中学校 2年
佐々木 誠吾(ささきせいご)さん

**一般の部**

島根県 出雲市
大田 寿子(おおたとしこ)さん

平成 21 年度防災ポスターコンクール入賞作品より
その他の作品は次のホームページからご覧いただけます。
http://www.bousai.go.jp/


内閣府(防災担当)
〒100-8969
東京都千代田区霞ケ関 1-2-2（中央合同庁舎第5号館3階）
TEL：03-3503-9394
URL：http://www.bousai.go.jp/km/